The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	上古音における喉音の再分類について
Author(s)	鳥羽, 加寿也
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2018, 52, p. 93-107
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/76065
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

上古音における喉音の再分類について

鳥羽　加寿也

キーワード：上古音／喉音／匣母／云母／暁母

1. はじめに

中古音の喉音、すなわち影喩暁匣の四声母は、舌音・牙音・唇音のように調音部位が同じ音を集めたものではなく、さながら印度式字母の表で後半に配置される諸字母のように、「余り物」をそこに帰属させたものである。喉音の中古音価は説によって細部が異なるが、おおよそ影ʔ-、喩四j-、暁h-/x-、匣及び喩三ɦ-/ɣ-となっており、喩四母を除く声母は声門音もしくは軟口蓋音であり、文字通りおおよそ「喉」の周辺で発音されるということは共通する。しかし、これは舌音・牙音・唇音において各声母の間に成り立つ共通点ほどには明確なものではない。では、中古音からさかのぼり、上古音系内においては、喉音四声母の間にはどのような関係が成り立っていたのであろうか。本稿では、上古音系内における喉音、特に影云暁匣の四母の関係と、喉音の再分類について検討し、それにより上古音体系の一端を明らかにすることを試みる。

検討に入る前に、所謂「喩四母」（或いは「以母」や「羊母」とも称する）について言及が必要であろう。本稿における以降の議論では「喉音」から以母を除外する。これは、以母が中古音において既にj-であり、他の喉音声母とは調音部位の点で著しく特徴を異にし、また上古音においても、独り流音で再構され、諧声・仮借の上でも影云暁匣母とは全く異なる傾向を示すためである。以下本稿で「喉音」の語を用いる際は、上古音か中古音かによらず、影云暁匣の四声母のみを指すと理解されたい。ただし、鄭張尚芳『上古音系』

による、韻図において喩母四等の位置に置かれる字の中には、実際は云母重紐四等相当の字が存在するという指摘を考慮し、諧声関係などから云母重紐四等であると判断することが適当である字については、云母字として扱う。

2. 喉音の諧声関係の確認

以下本論に入るが、まずは各声母の基本的な諧声関係について確認する。ここではまず、陸志韋『古音説略』所載の表を利用し、声母ごとのおおよその傾向を見てみたい。[1)]

影母は、傾向としては影母自身との他にも牙喉音と諧声するが、牙音の中では見母との結びつきが強く、また匣母及び云母との関係の深さも目立つ。

云母は、云母自身との諧声の他に、匣母と最も多く諧声し、また少数ながら以母、牙音とも諧声する。

暁母は、暁母自身との諧声の他に、牙音、特に見母と疑母と諧声し、また匣母とも多く諧声、さらに明母との諧声例もある。

匣母は、匣母自身との諧声の他に、牙音、特に見母と諧声し、また喉音の暁母と云母及び以母とも多く諧声する。

上述のように、喉音は全体的には共通して牙音と諧声するが、影云暁匣の四声母の字を、諧声符ごとに仔細に観察すると、牙音と諧声するものと諧声しないものが存在することがわかる。まずは下の表をご覧いただきたい。

表1　喉音諧声表

	陰匣	陰暁	陰影	入匣	入暁	入影	陽匣	陽暁	陽影
之職蒸	亥	灰	亥	戒	戒		弘厷亙	興	弘
	又矣尤郵	喜矣又	又医矣	或	或	或意抑			應
幽覚中	皐夼	臭九孝咎丂		𠂤告		𠂤	夆宮		
		休	麀幽幺憂			奥			
宵薬	高爻交	高交喬	爻交	雈敫	雈	敫			
	号	号	夭要						

侯屋東	侯后厚	句后	區后	殼角	殼		共工	共工冓孔	公
						屋		凶	邕雍
魚鐸陽	古瓜戶叚夏	虍古瓜叚去	夏	各矍	郭㝵桀		亢更黃光**㞷**	亢**鄉**黃光兄	光黃京竟**㞷**
	乎互下于羽禹雨華	乎羽于華	於烏于	畫蒦	霍蒦	亞蒦	行王	王香向享	熒央王
支錫耕	圭奚解	圭奚兒	圭	毄鬲	鬲**㚖**		頃巠回	殸巠回	巠
	兮**嶲**	兮**嶲**	兮	役	畫耆	益戹	幸熒	熒	賏
歌祭月元	果可加冎戈	吹果冎可	冎果可瓜	會介丯舌害犖曷	會介害舌曷害丯夬	會曷丯夬	閑見寒軌干閒**叩莧**官卷肙	干寒**叩**見肙夐	官軌卷肙
	爲禾	毀爲	韋委爲	彗惠戉	歲彗戉	歲愛	丸袁元焉員爰亘玄鬳奐患睘縣	員亘爰奐玄焉睘	**夗**焉晏㝨冤安燕患睘
微物文	豈鬼褱		鬼	貴乞出骨	气旡貴乞	骨出	艮軍昆侖	軍斤君	君軍
	韋回	希韋	衣威畏	胃曰		尉鬱	云圂	熏	昷憃殷
脂質真	皆稽	旨		自矞吉	矞	吉	臤		垔
	隹	隹		穴	血穴	一壹乙穴	勻	勻尹	淵因尹印
葉談				夾盍甲	盍甲夾	盍甲	甘舀兼敢監	敢兼甘僉監欠	舀敢
				曄		奄			猒
緝侵				合	及合	夾合	今咸	今咸	今
				立		邑	函	音	音

この表は、影云暁匣母字に用いられている主な諧声符の内、牙喉音と諧声するものをまとめ、それを韻部ごとに分類[2)]、更に諧声関係に基づいて、見渓群母と関係が深いものと浅いものとに二分したものである。云母は匣母の欄にあわせて記載している。表の各マスの中で、点線よりも上に配置された諧声符は見渓群母と関係が深く、下に配置された諧声符はおおよそ喉音内でのみ諧声し、見渓群母とは関係が浅い。

この表による分類がどのような意味を持つのか、以下匣母を手掛かりとして明らかにする。

3. 匣母の再分類

中古匣母字は韻図において一二四等欄に配置され、三等欄にのみ配置される群母字及び云母字と相補分布の関係にあることから、匣母は、上古音体系内においては、群母及び云母の一方と、或いは双方と同一の声母であった可能性が議論されてきた。匣群云の三声母の組み合わせの問題については、匣と群とを組み合わせる説、匣と云とを組み合わせる説、或いは匣群云の全てが同一の声母であったとみなす説等があるが、ここでは紙幅の関係上これらの説の詳しい議論は省く。[3] 本稿では、云母と群母の分布の偏在を同時に説明し得、かつ匣母の諧声系列が二種類に分かれる傾向にも配慮しており、現在のところ最も合理的かつ有力と思われる、匣母を二分してそれぞれ云母と群母とに帰する説を前提として議論を進める。

匣母二分の説そのものは李方桂が非公式に発表した意見がもとであるそうだが、筆者は寡聞にしてその詳細を認識していない。それ以降に、匣母二分に早期に言及した研究として、Pulleyblank1962がある。Pulleyblankは日本漢字音の呉音で、ワ行に読まれる匣母字が存在すること、また仏典の音訳で匣母がサンスクリットの「v」に対応しているといった根拠から、匣母が上古音では閉鎖音*g-と摩擦音*ɦ-の二系列に分かれていたことを主張した。

この議論について、Pulleyblankと並んで最も参考となる先行研究はYakhontovのものであろう。Yakhontov1977は、匣母が諧声関係上、群母を含む見組声母と関係が深いものと、云母及び暁母と関係が深いものとに分け、後者は合口に限られることを指摘し、それをもとに、前者の諧声系列に所属する群母及び匣母開口を*g-、匣母合口を*gw-、云母及び後者の諧声系列に含まれる匣母合口を*w-としている。[4]

以降の多くの有力な研究は、具体的な再構音価に多少の違いは存在するが、分類については基本的にYakhontovやPulleyblankの説を継承発展させ、匣母を二分、或いはそれ以上に細分している。現在広く受け入れられている、鄭張尚芳『上古音系』の上古音体系や、Baxter氏の再構音体系でも、さらなる

細分[5]が行われ、また云母の音価こそ変更されてはいるものの、匣母を再分類するという枠組みそれ自体は受け継がれていると考えても差し支えなかろう。

4. 匣１母及び匣２母の分類と匣２母の特性

ある匣母字が匣1母であるのか匣2母であるのかを判定する際に重視されるのは、諧声関係と合口性である。匣1母は見組声母と関係が深く、匣2母は云母や暁母と関係が深いと同時に合口である。しかしながら、見組声母と関係が深いと同時に、諧声系列の中に云母や暁母を含む字や、或いはその逆に、云母と関係が深く合口であるにもかかわらず、諧声系列の中に見組声母を含む字も存在する。これらの中間的な例をどのように扱うかにより、研究ごとに匣1母と匣2母の具体的分類に違いが出る。ここでは代表として、Yakhontov1977と邵栄芬1991の説を取り上げる。

Yakhontov1977は、合口性と諧声関係を基に、匣2母（及び云母）に該当する字として、「于乎羽禹華蒦王永嶲役畫熒又尤或厷爲戉歳爰亘袁奐惠彗寰縣回韋胃云軍員血穴矞旬匀尹」を諧声符とするものを挙げている。一方、邵栄芬1991は、多少の例外を認めつつも、群溪見母と諧声関係を持つものを匣1母、持たないものを匣2母とし、合口性は考慮せず、「有或兮幸井熒号顥乎華下互蒦回淮圂云惠穴玄彗犖雈丸亘爰原獻袁禾函劦」を諧声符とするものと、個別字として「**惽**覡壺夏王頁**贙衙**閑宦」等を匣2母字としている。本稿の表では、基本的にはYakhontovの分類基準に従いつつも、「函」のように韻尾に合口性があるために匣2母であるとは認められないものについても諧声関係を重視して暫時匣2母に分類している。

以下、Yakhontovや邵栄芬の研究を前提とし、匣1母と匣2母の区別基準と、匣2母の特徴について検討する。

まずは、匣母と疑母との諧声・仮借に注目する。匣母と疑母とは、少なからぬ諧声例があるが、仔細に観察すると、その中には見溪群母字を仲介とす

る間接的な諧声であるものと、直接的な諧声であるものが存在することがわかる。前者は「含（匣母）」:「今（見母）」:「吟（疑母）」の類であり、後者は「兮（匣母）」:「**伶**（疑母）」や「原（疑母）」:「**豲**（匣母）」が例として挙げられるだろう。後者の諧声系列には、見溪群母が含まれず、邵栄芬の基準でも匣2母に分類される。また、見溪群母とは諧声・仮借しない一方で疑母とは諧声・仮借するというのは、云母字の特徴でもある。諧声字では、「云（云母）」:「会（疑母）」や、「爲（云母）」:「譌（疑母）」の例がある。また伝世『礼記』緇衣の「出入自爾師虞庶言同。」の「虞（疑母）」を、上博簡『**紂**衣』は「雩」に、郭店楚墓竹簡『緇衣』は「于」に作っており、どちらも云母字である。さらに、上博簡『曹沫之陳』では、「矣（于母）」が「疑（疑母）」に通じる例もみられる。

匣2母と疑母との間にも、直接諧声の例があるのみではなく、通仮例も存在する。清華簡『殷高宗問於三壽』では、「□勹**备**（「原」の本字、疑母）」が「洹（匣母）」に通じる例がある。

一方、疑母字を諧声符とする諧声系列に注目すると、その中に群母字が含まれることはまれであり、見組の範囲でならばむしろ見母字が含まれることが多い。匣1母は上古においては群母に等しいので、先に挙げた云母字の諧声の特徴と考え合わせると、疑母と直接諧声関係を持つということは、匣母の中でも匣2母の特徴であるといえるであろう。

匣2母が疑母と諧声・仮借することは、Yakhontov1977に従い、匣2母及び云母を、*w-と再構することで、音声の方面からも説明することができる。このwは半母音であり、これが疑母*ng(w)-に容易に変化或いは混同されうることは、中古合口疑母字に現代北京語においてw-で読まれるものが多いことや、広東語においてng声母と零声母が混同される例が多いことなどと類似する現象である。[6)] 匣2母と疑母との諧声及び云母と疑母との諧声は、ng(w)-とw-が混同される、或いはng(w)->w-という変化を起こしていた方言の反映であると考えられるが、今はそのどちらであるか判断することはできない。

以上のような考えにより、諧声系列に、牙音である疑母が混在、或いは疑

母字と通仮する匣母字は、それを理由として匣1母であると決定することはできず、むしろそのことにより、匣2母であると可能性が高いとみなすことができるといえよう。

本稿の諧声表に於いて、Yakhontovと邵栄芬がともに匣1とする、「元」を諧声符に持つ匣母字を、匣1ではなく匣2としているのは、「元」が疑母字であり、匣母字「完」がそれと直接諧声しており、またその諧声系列には于母字「院」が含まれ、更には「院」の異体字「寃」が明らかに匣2に属する字であるといった理由、更には「完」が馬王堆漢墓帛書『養生方』等で匣2母の「丸」と通じている例があるためである。

次に、匣2母と唇音の関係についても言及しておきたい。匣2母は基本的には他の喉音とのみ諧声・仮借し、まれに牙音と諧声関係を持つが、更にごくまれに、あくまで例外的にではあるが、唇音と関係することもある。このことについては、既にPulleyblankが、『説文』における、「爲（云母）」:「皮（並母）」や、「八（幇母）」:「穴（匣母）」の諧声関係や、また「永（云母）」と「脈（明母）」「派（滂母）」の同源字に言及している。ここにさらに、出土文献における通仮も数例追加したい。阜陽漢簡『詩経』考槃では、現行『毛詩』の「永矢弗告」の「永（云母）」を「柄（幇母）」に作り、また同『詩経』旄丘では、「旄丘之葛兮」の「旄（明母）」を「鴞（匣母）」に作るといった例がみられる。

このような現象について、本稿では匣2母を*w-と再構し、wが唇と軟口蓋の同時調音であるために、偶発的に唇音と諧声・仮借し得たという解釈を提示したい。于弗2004は、阜陽漢簡『詩経』旄丘の例を、明母と諧声する暁母*xm-を仲介したものと解釈しているが、このような解釈を採用すると、明母以外の唇音との関係を説明することができないため、本稿の解釈の方が妥当であろう。

ここまでで、匣1母と匣2母を分けること及び、匣2母の音価を*w-とすることが確認できた。以下、匣云以外の二声母、すなわち暁母及び影母についての検討に入る。

5. 匣母と暁母の類似性

中古音において、暁母は一二三四等韻と結びつき、匣母が群母及び云母と形成するような相補分布関係を他の声母と持つことはない。そのため、暁母を単純に他の声母に帰属させることは、分化条件の面から困難を伴うが、一方で、諧声・仮借の状況については、匣母と非常に類似しており、上古音系内でも、匣母と暁母は対になる声母であったことが予想される。

暁母について匣母と比較する前に、中古音声母の中でも暁母に特有な諧声現象について説明が必要であろう。暁母は、『古音説略』の統計を参照すれば明らかなように、牙喉音との諧声以外に、特に明母と疑母とのまとまった諧声関係を有する。今それぞれ一例を挙げれば、「黒」（暁母）:「墨」（明母）並びに「午」（疑母）:「許」（暁母）がこれにあたる。

このような暁母は通常、上古音では無声鼻音或いは*sm-,*sng-のような複声母に由来すると考えられており、匣云影母とはほぼ無関係である。本稿はあくまで上古音系内における喉音四声母の関係性を明らかにすることを目的とするため、このような暁母は上古においては明母・疑母の下位分類であったと見做し、諧声表ではこの類に属する諧声符は除いている。

このような処理を経たうえで、暁母の諧声関係を観察すると、それが匣母の諧声関係に非常に類似していることがわかる。すなわち、喉音の範囲内でのみ諧声する諧声符はおおよそ合口に限られ、その分布も匣2母諧声符の分布に非常に類似しているということである。また、そもそもそのような諧声符は匣2母の諧声符と同じものであることが多い。以下、暁母も匣母と同様に二分することができると仮定し、喉音の範囲内でのみ諧声する暁母を仮に暁2母、見組とも諧声するものを暁1母と呼ぶ。

表に挙げた暁2母諧声符の中では、「喜休希香向享」が開口であるが、「壴（喜）」は匣2母で例外的に開口である「矣」と通じる例が郭店楚簡『性自命出』等にみられるため、「喜」は例外的に開口なのであろう。また「希」については馬王堆帛書『陰陽十一脈灸経』乙本の「久希息則病已矣」は甲本では「久

幾息則病已矣」に作るため、実際は暁1母である可能性が高い。そのほかに、「向」「香」「享」についても暁1母「郷」およびその諧声字と通じる例があるため、暁1母であろう。加えて、これらの諧声符はその諧声系列に所属する字が少ないため、諧声のみで暁1母であるか暁2母であるかの判断を下すことがそもそも難しい。総合的に判断すれば、これらの諧声符を暁1母のものと判定できる可能性がある。この点についてはさらなる資料が必要であるが、今はこれらを暁1母であると考える。

さて、匣母を二分する際に、その重要な根拠の一つに、匣2母の分布が合口に偏っている（ために、*w-が再構される）ということがあった。Yakhontovは、匣2母の諧声系列に現れる暁母を*sw-或いは*wh-と再構したが、今暁母全体の諧声関係を見るに、暁2母には明らかに合口性が認められ、全体としても匣母に非常に類似しているため、上古音系内での匣母と暁母との関係は、中古音で暁母と匣母とが清濁で対立するのと同様に、暁2母清*wh-と匣2母濁*w-、暁1母清*kh-と匣1母濁*g-の対立と見るのがよかろうかと思う。暁1母の詳細な音価については、*kh-では渓母と衝突するため、何らかの細微な差を考える等の議論の余地はあるが、匣母と同様、暁母も二分するべきであるということは、諧声・仮借の状況の類似性を見れば明らかではないだろうか。

6. 影母二分の可能性

影母は韻図では暁匣云母と同じ「喉音」のカテゴリーに帰されており、潘悟雲1997は暁匣との対応関係を重視して、影母の上古音を*q-と考え、（本稿の暁1母と暁2母を分けず）暁母*qh-及び匣2母*ɢ-と合わせて、影暁匣2で、口蓋垂の無気無声、有気、無気有声となる体系を主張している。一方で、影母は上古音であれ上古音以前であれ、一貫して?-であったという古くからの見方は、画期的ではないものの、言語として非常に自然であり、このように考える場合は、影母は暁2母及び匣2母と整然とした対応関係を有しな

いこととなる。

諧声・仮借の状況で、牙音との関係性の深さによって諧声符を二分するという操作は、影母に対しても行うことができる。以下影母にも二種類の由来があると仮定し、見組とも諧声するものを影1母、喉音内でのみ諧声するものを影2母と呼ぶ。表を一見すれば明らかなように、二分した結果には、匣2母及び暁2母がほぼ存在しない幽覚中部及び宵薬部にも影2母が存在し、またその諧声字は合口字に限定されないといった違いがある。このような違いは、匣2母及び暁2母が合口性を有することに対して、影2母がそれを有しないことによるものであることは明らかである。潘氏が喉音の系列に上古音として口蓋垂音を想定するのは、それによって一部の匣2母に（潘氏の見方によれば）後に合口介音が発生したことを説明することができるという点も考慮したものであったが、今諧声関係を観察するに、影2母が合口性を示さないということは、匣暁影母の間に有気無気或いは有声無声による対立のみを認め、これらを見溪群の如き対立と並行して考えるという見方の困難さを証明するものである。[7)]

一方で、影母は、影1母も影2母も、すべて上古*ʔ-に由来するという見方にも別の困難が存在する。[8)] 影1母及び影2母が同音であったとすると、これを仲介として、上の章で既に二分した匣母及び暁母の境界が曖昧になってしまうという問題である。この問題はそもそも匣母及び暁母を二分しなければ存在しないという論も可能であろうが、影母の諧声系列が見組との諧声を基準にして二分することができるということに対しては何らかの解釈が必要であり、その解釈としては、他の声母、例えば定母について、以母との諧声を基準に二分し、以母と諧声するものを*l-と再構することが可能なように、やはり影母には二種類、或いはそれ以上の異なる由来が存在すると考えるのが妥当であろう。

影1母については、暁1母或いは匣1母と共通の諧声符を用いていることが多く、また分布特徴の面でも、各部にあまねく存在し、暁1母及び匣1母の特徴と大差がないため、潘氏による再構のように、暁1母と匣1母とに対

応するような音を想定するのがよかろうかと思う。本稿では曉1母をおおよそ*kh-、匣1母を*g-と想定しているので、影1母はおおよそ*k-と再構する。無論これでは見母と衝突するため、実際にはBodman1980のように、*sk-を考えるといったことが必要であろう。[9)]

影2母には、曉2母或いは匣2母の諧声符が用いられることもあるが、多くの字は影2母単独で諧声系列を為しているため、これを中古音と同じʔ-で再構することに問題はなかろう。曉2母及び匣2母の諧声符を用いているのは、それらがほぼ合口に限られることを考えれば当然ではあるが、影母合口の場合に限られるため、影母合口*ʔw-と*w-,*wh-の関係であると考えれば非常に自然である。

7. 結び

本稿では、喉音各声母について、諧声・仮借関係によって二分すると同時に、各声母間の関係を検討してきたが、凡そ「分類する」ということについては、常に「例外」が存在し、その例外に対する見方が体系全体の再構に直接影響するということも少なくはない。本稿で扱った匣母の二分についても、Yakhontovは多少の例外を許容したうえで、全体の傾向から匣母を分類したが、一方で、董同龢は『上古音韵表稿』で、匣2母「或」の諧声系列に見母字「國」があるというような例外を重視し、匣母の二分を否定する。本稿では全体の傾向を重視し、少数の例外は問題としなかったが、今後の課題としては、そのような例外が時代の問題であるのか、地域の問題であるのか、もしくは董氏の如く実は併せるのが妥当であるのか、細かく検討を進めることである。

［注］

1）『古音説略』228 ～ 230 頁。喉音が牙音の中では見母との諧声関係を多く持つのは、音声の問題ではなく、見母字が渓母字及び群母字よりも数が多いといった要素を考える必要があろう。また、『古音説略』の統計で云母及び匣母に以母との諧声が多くみられるのは、上述の、（韻図上の）以母字の中には相当数の云母字が含まれることを考慮に入れていないためであろう。

2）ここでの分部は一般的なものに従っているが、脂部と微部については、王力の分部法ではなく、Yakhontovの分類法に依る方が、後に述べる匣 2 母及び暁 2 母の分布特徴がより一層明確に現れる。

3）この議論の流れについては、邵栄芬 1991 に詳しい。

4）匣母の一部及び云母の音価を *w- とする研究としては、Yakhontovのものの他、兪敏 1984「後漢三国梵漢対音譜」がある。兪氏は匣合口字と云母字がサンスクリットの「v」に対応することを根拠に、これらの声母を「全く疑いなく」wであると断言している。上古音～中古音の間の時代に、本稿でいう所の匣 2 母字及び云母字が、他にサンスクリット「v」（［w～v］）に対応しうると思われる、並母字 *b- や影母合口字 *ʔw- を差し置いてまで「v」に対応しているのであるから、兪氏の断言ももっともであろう。兪氏の調査対象はあくまで後漢三国なので、厳密に考えるならばこれをそのまま上古音とは断言することはできないが、上古匣 2 母及び云母に *w- を考える場合の強い根拠の一つとはなる。

5）『上古音系』の体系では、本稿でいう所の匣 1 母と匣 2 母の区別（鄭張氏は匣 1 母にあたるものをg、匣 2 母にあたるものをɢと再構）の他にも、以母や来母との諧声のために、それぞれɦl,ɦrといった、ɦを頭に持つ子音クラスタを再構している。その他、まれに存在する、明母と泥母との諧声関係を説明するために、ɦm,ɦnを立て、さらに、本稿ではng(w)- とwの混同で説明する、疑母との諧声関係を説明するためにɦngを立てている。本稿では、このような例外的な少数の諧声関係を説明するために、それ「専用の」複声母を立てるのは、複声母の分布の偏りから見て不自然であると考え、匣母を二種類以上に分類することは行わない。いずれにせよ、鄭張氏の再構音体系も広く見れば匣母二分の発展形であることには変わりはないであろう。

6）上に挙げた疑母字の内、「㕣」「譌」「虞」「原」は合口であり、「疑」は合口ではないものの、之部字であり、之部は鄭張尚芳『上古音系』の再構では -ɯ とされ、非円唇ではあるが、iよりは奥寄りであり、「疑」ngɯ >「矣」wɯ のような変化を考えることは可能であろう。

7）潘氏はこのような疑問に対して、于母 *ɢ- は、他の喉音よりも長く口蓋垂閉鎖

音の状態にとどまっていたためであると説明するが、これは当然ながら潘氏の暁母 *qh-、影母 *q- とする説を前提としたものであり、本稿ではすでに暁2母を *wh- と考えているため、前提が異なる。

8) 影母をすべて中古音そのまま *ʔ- と再構することへの批判については、本稿で挙げた理由に加え、潘氏が影母について論じている部分で挙げている根拠が参考となる。

9) 分化条件をあまりに厳密に考えることは、かえって「非科学的」であると筆者は考えている。なぜならば、諸々の資料により再構された上古音系とは、本質的には一種の「総合音系」であり、現実の先秦前漢の広い時空間の諸方言の最小公倍数分類であって、『切韻』に代表される中古音系の直接の祖先ではなく、またそもそも「中古音」自体も総合音系であるために、その二つの間に厳密な対応規則が成り立つ保証はないためである。真に「科学的」な方法とは、上古音系があくまで虚構の音系であることを認めたうえで、その虚構の音系に対して「自圓其説」を求める方向に向かうのではなく、総合音系を利用して、徐々に時代・地方を限定した個々の現実に存在した音系の探求を進めていくことではないかと、筆者は考えている。

［参考文献］

白於藍『簡帛古書通假字大系』，福建人民出版社，2017
董同龢『上古音韵表稿』，中央研究院歴史語言研究所，1944
陸志韋『陸志韋集』所収『古音説略』(1947 年発表)，中国社会科学出版社，2003
潘悟雲「喉音考」(『著名中年語言学家自選集：潘悟雲巻』2002 年所収) 安徽教育出版社，1997
邵栄芬「匣母上古一分為二試析」,『語言研究』，1991 年第一期
沈兼士『広韻声系』，中華書局，1985
許慎撰、徐鉉校定『説文解字』，中華書局，2013
于茀『金石簡帛詩経研究』，北京大学出版社，2004
兪敏「後漢三国梵漢対音譜」(『兪敏語言学論文集』所収)，1984
鄭張尚芳『上古音系』(第二版)，上海教育出版社，2013
Bodman, N.C.「原始漢語与漢蔵語：建立両者之間関係的若干証拠」(原題 Proto-Chinese and Sino-Tibetan : Date Towards Establishing the Nature of the Relationship)，潘悟雲訳(『原始漢語与漢蔵語』1995 年所収)中華書局，1980
Pulleyblank, E.G.『上古漢語的輔音系統』(原題 The Consonantal System of Old Chinese)，潘悟雲・徐文堪訳，中華書局，1962
Yakhontov, S.E.「上古漢語的起首輔音 W」，張双棣訳、顧越校閲 (『漢語史論集』1986

年所収)，北京大学出版社，1977
文物局古文献研究所・安徽阜陽地区博物館阜陽漢簡整理組,「阜陽漢簡『詩経』」,『文物』1984 年第八期
馬王堆漢墓帛書整理小組編『馬王堆漢墓帛書(肆)』，文物出版社，1985
荊門市博物館編『郭店楚墓竹簡』，文物出版社，1998
馬承源主編『上海博物館蔵戦国楚竹書(一)』，上海古籍出版社，2001
馬承源主編『上海博物館蔵戦国楚竹書(四)』，上海古籍出版社，2004
清華大学出土文献研究与保護中心編『清華大学蔵戦国竹簡(五)』，中西書局，2015

(大学院博士後期課程学生)

摘要

上古喉音的再分类

鸟羽 加寿也

中古声母喉音类的上古拟音及喉音各声母之间的关系是音韵学难题之一。先行研究表明匣母应该分两类，一类与群母相配，读 *g-，另一类与云母相配，读音还没有定论。本文从匣母一分为二的细节问题及匣云母的拟音问题入手，探讨上古影云晓匣四母之间的关系。

匣云母一般与牙喉音谐声的同时，有时也与疑母接触，偶尔也与唇音关联。本文支持 Yakhontov 的拟音，认为匣云母上古读音是 *w-。匣母与疑母、唇音通假的事实只有把匣云母拟为 *w- 才可以得到圆满的解释。

关于喉音四母之间的关系，本文主张上古晓母、影母也应该分两类，一类与牙音相近，另一类则独自形成一类。晓母谐声情况与匣母极为相似，与喉音谐声的字都有合口性，与牙音谐声的字则具备开合口，足以证明整个晓母与匣母在上古也构成一对清浊关系，与喉音谐声的晓母上古读音应该是匣云母 *w- 的送气音 *wh-。影母也可以分两类，只是开合口无限制，可见影母并非晓匣之清音。